

コロナに負けるな！居合道部活動だより

居合道の紹介も兼ねて、2つの行事を報告します。

居合道の技は、剣道家の修練の基本素養として、昭和44年

「全日本剣道連盟制定居合」7本が制定されたのが「全日本剣道連盟居合」の始まりです。ご存知でしたか？



大阪居合道部の紹介

古流と全日本剣道連盟居合の誕生

居合道の技は、剣道家の修練の基本素養として昭和44年「全日本剣道連盟制定居合」7本が制定され、以後「全日本剣道連盟居合」という共通の形が生まれました。昭和55年新たに3本、平成12年にはさらに2本が追加され現在12本となっています。

因みに「全剣連制定居合12本」は、

- | | |
|----------|-----------|
| 一本目 前 | 七本目 三方切り |
| 二本目 後ろ | 八本目 顔面当て |
| 三本目 受け流し | 九本目 添え手突き |
| 四本目 柄当て | 十本目 四方切り |
| 五本目 袈裟切り | 十一本目 総切り |
| 六本目 諸手突き | 十二本目 抜き打ち |

流祖は室町時代末期の林崎甚助重信といわれ、現在20数流派が活動しています。

大阪では無双直伝英信流・無外流・夢想神傳重信流・田宮流・伯耆流の5流派が活動しています。

居合道修練の意義

居合道は、武士が修練した真剣そのものの日本刀の操作であり、不意の攻撃に対し、速やかに臨機応変平常の心と錬磨による技を持って、これに応じて先または後の先に直ちに勝ちを制する武道です。我が国、古来の伝統文化であり、居合道修業の最終目的は、相手との無益な争いを避け、刀を抜かずして勝ちを収める和の精神にあります。そのためには、相手に刀を抜かせないだけの人間としての品格・気位がもとめられます。これこそ全日本剣道連盟が武道修業の最終目的としている人間形成の道に他なりません。

(居合道部・部長 範士八段 光行良一)

第56回 全日本居合道大会

令和3年10月9日、東京武道館において「全日本居合道大会」が開催されました。

毎年10月に、

全日本居合道大会が開催されます。これまでは、各都道府県が持ち回りで開催されていましたが、昨年の石川県での開催がコロナ禍での感染拡大防止のため中止となり、今年度から当分の間、東京での実施となりました。

大阪府では、例年3回の選考会、

監督並びに五段、六段、七段の選手を決定し、10月9日に東京武道館での大会に出場しました。

試合方法は都道府県対抗の団体戦

各都道府県の代表3選手が、各段毎、3試合会場に分けて、トーナメント方式により試合を行い、各段毎に第一位、第二位を決めます。勝者には、勝つごとに1点を与え、各選手3名の得点(勝数)の合計数を以って団体

成績を決定します。

演技については、試合時間6分以内に技5本(古流自由技2本と全剣連居合の当日指定技3本)を抜きます。



大阪府代表選手と監督

居合道観戦のポイントは、

「定められた技を型どおり行っただけでは何の緊張感もなく、かたちばかりの踊りになってしまいます。真の武道たるには、実際に敵が眼前にいるかのごとく仮想敵と戦うことが大切で、それは生きた『目付』に現れます。また、居合はただ早く抜けばよいというものではありません。居合の目的は人を殺すことではなく、生かすことにあります。刀は人を切るだけの殺人刀であってはならず、破邪顕正の活人剣でなければなりません。

思いのほか刀に手をかけてから抜き付けるまで、あるいは振りかぶってから切り下すまでゆっくりしているなと感じた人も多いのではないのでしょうか。まさに、敵が切りかかろうとしても、最後の瞬間まで『抜くな、抜かすな』という気持ちで相対し、『抜付』の一刀の後、もし相手が参ったという態度を示せば、あえて切る必要はありません。それでも、どうしても刃向かうようであれば、止む無く止めの一刀を加えて成仏させるという気持ちがそこに表現されています。命がけのぎりぎりの場でも、冷静さを失わず、相手に対する思いやりを忘れないだけ

の度量と高い人間性が求められています。すべてが終わった後、刀についた血を振り落とす『血振り』、続いて刀を鞘に収める『納刀』が行われますが、この間、一瞬たりとも姿勢が崩れ、残心が乱れてはいけません。

この動から静に移る一瞬の沈黙の間は、能の舞台における『せぬひま』に対比され、居合道の精神性を最もよく示す瞬間でもあり、見所の一つです。」

大会に向けての大阪府の取り組み

今年度は、コロナ禍での緊急事態宣言等により、公共施設の使用が制限され、稽古場所の確保に苦慮しましたが、近隣県の協力もあり選手団の稽古を進めることができました。結果は、皆様のご期待に応えられるようなものではありませんでしたが、それぞれの選手にとっては、十分な手ごたえを得ることができた大会となりました。

今後は、この貴重な経験を活かし、さらに技量を高めるとともに、大阪居合道の発展に少しでも役立つことができるよう選手団一同、精進して参りたいと存じます。

(大阪府選手団監督・

居合道部・副部長 教士八段 本郷雅昭)



五段の部 大場選手



六段の部 吉田選手(右)



七段の部 中島選手(左)

～がんばっている皆さんを
応援しています!!～



大阪府剣道連盟主催 令和4年度 特別講師居合道講習会

令和4年4月2日・3日、桜が満開の大阪城内、大阪市立修道館において、「全日本剣道連盟居合」の正しい理解と技法の向上をめざし、全日本剣道連盟居合道委員会委員長・範士八段草間純市先生を講師にお迎えして、講習会を実施しました。(参加者数 148 名)

本年も新型コロナウイルス感染症対策により、受講者数に制限を設け、第一日目は七段から五段、第二日目は四段から二段を対象としました。本来なら二日間に渡り、ご指導をいただけるのですが、感染防止のためのやむを得ず、指定された日の一日受講となりました。

参加者はご指導をいただけるだけでも幸せと、いっそう集中力を高め、講習を受けました。はじめに、居合道の理念、修練および指導の心構え、武士道の根本精神について、ご講話をいただきましたが、特に指導者は「相手を敬い、どうしたら上手く導くことができるか」を念頭に「北風と太陽の指導」、厳しさと優しさのバランスの取れた指導が大切とのお話には参加者一同、感銘を受けました。

実技では、礼法および術技十二本について、要点を丁寧に解説いただくとともに、理にかなった動きの修得や技の冴えに直結するポイントをご教示いただきました。その場で修正すると動きが変わり、刀捌きに鋭さが出るなど、受講生は「目から鱗が落ちる」体験をすることができました。日々の鍛錬の基本である素振りについても、より効果的な指の使い方や操刀について、受講生の技量が高まる貴重なアドバイスを頂戴しました。

講習の最後には、段別の演武をしましたが、受講生全員が講習の成果を講師に見ていただこうと、気を込めた迫真の演武をしました。草間先生よりも、熱心な受講と術技の向上にお褒めの言葉をいただきました。



一日目



二日目

講習終了後、受講生からは、「技が上手くできたと実感することができ、嬉しかった。」「刀や体の使い方についてコツや感覚を具体的に教えていただき、よく理解できた。」「居合道修業が楽しくなるご教示をいただけた。より真剣に取り組みたい。」など、自己の術技のレベルアップと心の修練の大切さに気づかせていただくことができた喜びの声が多数寄せられました。

講師の草間先生の二日間に渡る懇切なご指導に参加者一同、心より御礼申し上げます。

(居合道部・副部長 教士八段 無津呂弘之)

シリーズ『日本人と刀』④

～シリーズその4は剣の五徳、剣の理法と五せい眼の解説です。(大剣連監事 山本茂伸)

5. 剣の五徳

「剣道」の名称は「多知伽伎(タチガキ)」、「太刀打ち」から「兵法撃剣」、更に今日の「剣道」に至るまで幾多の変遷があり、そのやり方も時代と環境によって著しく異なっていた。しかし、昔から今日に至るまで「剣道は人を切るものでなく、自分の非心を斬るものである」という一貫した思想に貫かれている。

塚原卜伝は「以心伝心の二刀は我慢の鋒を斬り、悪念の兆しを断つ」と云っており、示現流では「心の利剣をもって、刹那の間も三毒を胸中に宿せず、常に切断なるべし」と戒めている。また、柳生石舟斎は「我、人に克つ道を知らず、われ、我に克つ道を知れり」と云い、明治時代に無刀流を創始した山岡鉄舟は「剣道は人に打たれず我打たず、只無事なるを妙としれ」と詠っている。

このような剣の思想は、江戸時代に入り武士の必須科目とされた剣道においても継承され、徳川幕府の儒教奨励策も相まって『剣の五徳』として成立した。

<剣の五徳>

1. 正義：「心・身・態度・行い」を正すことで、孔子の「仁」、釈迦の「慈悲」に相当するもの

いかなる人間、どのような社会にあっても「人の世の基本となるもの＝普遍的な根本原理」に従って、個人的な利害・打算損得を超えた犠牲的精神を伴うもので、その遂行には「信念・覚悟」が必要となる。

「正を踏んで恐れず」

「顧みてやましからざれば千万人と雖も我往かん」

「生ある者誰か死を惜しまざらん。されど義によって死を軽んずるは弓矢とる身の習しにて候」(木村重成)

2. 廉恥：人前にて笑われること、恥をかくことを人間最大の恥辱と考えること

鎌倉時代の「恩顧と奉公」、「弓箭とる身の習」・「坂東武者の習」、「打算を超えた無償の奉公」が基礎となり成立。

「身は捨てても名は捨てぬ」

「かりにも名こそ惜しく候え」

「散りぬべき時知りてこそ世の中の 花も花なれ人も人なれ」(細川ガラシャ辞世の句)

3. 勇武：勇猛果敢、勇気凛々な様で正義・廉恥の根源「義をみてせざるは勇なきなり」

「義は勇に依って長ず」

4. 礼節：礼儀と節度

礼という漢字は心の豊かさ、即ち相手を尊敬する心を形にしめたもの。

剣道は礼に始まり礼に終わる。稽古や試合時等の礼(道場・団体・上座・個人)には相手を尊敬する心を忘れてはならない。

5. 謙譲：人を優先して自らは控え目にする

「知足安分」：足るを知り分を守ること。「能ある鷹は爪かくす」と同義で、才能はあっても己の分を守って出しゃばらないこと

「気は大納言の如く、身は足輕の如し」：気位は大納言のように高く持っても、これは深く蔵して表に現さず、身は足輕の低きに比してこまめに真摯に行動すること

※袴の五倫五常と忠孝一如について

袴のヒダは前に5本、後ろに1本あるが、前の5本は五倫五常を表し、後ろの1本は忠孝一如の表徴といわれている。五倫五常は儒教の基本となる教え。

※「武の七徳」について

①暴を禁じ②兵をやめ③大を保ち④功を定め⑤民を安んじ⑥衆を和し⑦財を豊かにする(春秋左史伝)

この精神を汲んで「武徳会」「七徳殿」、「七徳館」という名称ができた。

6. 剣の理法と五せい眼

(1) 剣の理法について

全日本剣道連盟理念として「剣道とは剣の理法の修練による人間形成の道である」と定められている。

「剣の理法」とは「剣理」と「剣法」である。

「剣理」：「剣の理合」つまり「打突」の合理性である

「剣法」：「剣の法則」であり刀(剣)で物を斬る際の物理的な絶対条件(①刃筋を立てて切る②押し切りまたは引き切り③物打ちで切る)

(2) 五せい眼について

竹刀剣道では「中心をとる」ことが大事とされており、剣尖は相手の身体の正中線に向けることが多い。しかし、刀を前提としている剣術諸流派では剣尖の付け所によって「せい眼」を五分類していた。それは真剣勝負では剣尖の付け所が勝敗に大きく影響したためであり、その違いが流儀・流派の分岐点になった。

<五せい眼>

1. 正眼：剣尖を相手の咽喉部につける

2. 晴眼：両眼を日月になぞらえて、その中間につける

3. 青眼：相手の左目につける

4. 星眼：天上の星になぞらえ相手の額の真中につける

5. 臍眼：相手の臍(へそ)につける

(次回はいよいよ最終回です)